

# Close Up

## 主は私の運命を支える方 (詩編 第16編5節)

両親は共に画家で教育者でもあり、転勤で鹿児島県内を転々としてきましたが、おかげで自然を相手に遊び育ちました。牧師夫人だった祖母の影響で高校1年生の時に洗礼を受けましたが、両親の不和がひどくなる一方でとうとう高校卒業後に家を飛び出してしまう、新聞奨学生をしながら浪人時代を過ごしました。初めて世間の風に触れ、その厳しさと孤独を知りました。多感

な時期に下町のいろいろな人々と出会い、そこでの経験が福祉を学ぶきっかけになったと思います。

大学では司法福祉と矯正教育学を専攻する一方で、聖書研究会と武道家である叔父の影響もあって空手部に所属し、余暇のほとんどを部活と教会活動に費やしていました。

## 司法福祉と矯正教育の現場、少年院と拘置所勤務15年

大学卒業後は少年院の法務教官を6年間勤めた後上級職にな

り、刑務所刑務官の研修所教官や拘置所の副看守長、経理や人事などを担当する管理職など合わせて15年間法務省の現場にいました。法務教官になろうと思ったのは、大学のゼミで非行少年や犯罪者の矯正教育の先駆者、留岡幸助のことが書かれた著作に出会い感銘を受けたからです。留岡幸助は明治時代の牧師で、日本で初めて不良少年感化のための家庭学校をつくった矯正教育の父とも呼ばれる人で、題名は確か『一路白頭二到川』で、岩波新書だったと思います。今

# 司法福祉と矯正教育の場で育んだ 優しさと厳しさが 生徒の心をつかみます。

宮之原先生は大学を卒業後15年間、少年院や拘置所など司法福祉と矯正教育の現場一筋に歩んでこられました。もしかしたら死刑執行のボタンを押す巡り合わせすらあったかもしれないと当時を振り返る先生は、どんな環境の中でも人間同士の心の触れ合いの大切さは普遍のものとおっしゃいます。金城学院高等学校で教鞭をとられて4年、ようやく街で生徒に声を掛けられるようになったと楽しそうに話していただきました。



## 金城学院高等学校 宮之原 弘 教諭

1961年生  
日本福祉大学社会福祉学部卒業  
法務省瀬戸少年院法務教官、名古屋拘置所副看守長、矯正研修所人事係長などを経て2000年から金城学院高等学校教諭  
日本キリスト教団金城教会会員  
著書/「司法福祉の焦点」(1994・ミネルプア書房)「日本の児童福祉18」(2003・全国児童擁護問題研究会)いずれも共著など



旅行が大好きだった  
大学時代の先生

は絶版のようです。

### 「間合い」を大切に築く 生徒たちとの信頼関係

2000年に教会の人を通じて、これまでの社会経験を学校教育の場で生かしてみないかとお話があり、金城学院高等学校に来ました。担当は社会科のほか総合的な学習の「障害者福祉」の授業で、命の尊さ、互いに支え合って生きる大切さを伝えています。課外活動では空手道部の顧問をしています。護身術（逮捕術）が専門ですが、現在剛柔流空手道2段。今秋には審判員の資格を取り、大会では主審も務めます。空手部員は21人おり、最近大会で優勝したほか、高校ではめずらしい古武道も始め、

宮之原先生を囲んで、  
高等学校2年生の  
石黒理佳さん(左)、長尾有夏さん(右)

区民祭で演武の披露もしました。

金城学院高等学校に赴任して4年目、ようやく生徒が街で声を掛けてくれるようになったと思います。前職時代に少年院の中学生から死刑囚まで広く接して思うのは、人間の本质は変わらないということです。どんな人でもかけがえのない命と魂が与えられ、よりよく生きたい願

課外活動で空手道部の顧問も務めている



いは変わりません。

私たちの前には必ず神がおられることを忘れず、自分も相手も追い込まない「間合い」を大切に、これからも生徒たちとの信頼関係をつくりたいと思います。

宮之原先生はこんな人

### 自分のこと以上に 私たちのことを真剣に考えてくれる先生です。

先生にも高校2年生の息子さんがいらっしゃるせいか私たちのことをよく分かっていただけ信頼できます。クラスに問題が起きて、まず私たちの話をじっくりと聞き、私たちにとってどうしたら一番いいか真剣に考えてくださいます。いつも穏やかな口調で、授業の時に話される少年院や拘置所での工

ピソードも心にじんわりしみ込みます。すごく暑がりなのに、みんなが風邪をひかないようにクーラーを弱くして汗びっしょりになってしまう優しい先生です。みんなそんな先生が大好きですから、担当科目の社会は特に熱心に授業を受け、クラスの平均点も高いほどです。

